

国際連携アクティブラーニングにおけるICT活用の実践研究

池田明（大阪市立東高等学校）

概要：近年、国をまたいだ協働学習を取り入れた実践例が多くみられるようになった。そんな中で、主体的な情報活用能力を実践的・体験的に習得させ、交流相手との共感的な国際理解を目指すために必要なICT活用スキルについて、長年取り組んできた国際交流プロジェクトの実践に基づいて考察する。

キーワード：情報活用能力・国際協働学習・多文化理解・アクティブラーニング・探究学習

1 はじめに

日本の教育現場における今日的課題の一つとして、国際的な視野と競争力・発信力を持つ学生・生徒の育成の重要性があげられる。近年、国際交流を取り入れた実践例も多くみられるようになった。そんな中で高等学校における国際交流活動の主目的を、以下の三点と考え実践を続けてきた。

1) 主体的な情報活用能力の実践的・体験的習得
さまざまな交流活動を行ったり、イベントに参加、また生徒自身が運営したりすることで、単なるコンピュータ操作スキルやネットワークの知識習得だけでなく、主体的に情報活用能力を身につけさせる。

2) 高校生の視線での多文化理解

海外との国際交流活動の重要な目的のひとつは、多文化理解である。しかし、現状の実践では歴史的な民族文化や観光資源や環境問題などに国際問題に関するテーマで行われているものが多い。高校生が自身の普段の生活についての情報交換を行い、より身近な話題を通じて外国との文化の違いや共通点を考察させる。自分自身の実体験を情報として共有することで、交流相手との共感的な国際理解を目指す。

3) 交流に必要なコミュニケーション力の習得

インターネットを活用した交流活動を継続的に実施していくことで、ネットワークの活用スキルと、共通語としての英語の表現力を身につけさせる。

このような実践を通して、教員が単に交流諸活動の指導にあたるだけでなく、国際交流コー

ディネータとしての役割を担わなければならないことを感じるようになった。海外の学校の学生・生徒と結んでの交流活動では、誰かがこの役割を担い、円滑な活動をサポートしなければならない。さまざまな交流活動において、時には学生や保護者などのボランティアスタッフがこれにあたり、旅行社に依頼してさまざまな手配や添乗とともにサポートしてもらったりする方法も一般的にみられる。しかし、最終的なコーディネートの責任者は学校の事情や教育的意義をよく理解している教員が担うのが最も適していると考えられる。

国際交流活動において、教員としてどのようなサポートを考えなければならないのかを、実践例をもとに考察する。

2. 国際交流活動の実践例

1) ワールドユースミーティング(WYM)

ワールドユースミーティングとは毎年夏休み期間に実施される学生・生徒・児童向けの国際交流会議である。この趣旨は、以下のように述べられている。



『福祉、環境、国際などをキーワードとする教育はk-12においては「総合的な学習」分野でとりくまれ、高等教育においても欠かすことの出来ない分野である。しかしながら、座学としては成立しているものの、具体的な交流場面をイメージした取り組みの成功例は数少なく、ましてインターネットの教育利用と連動した企画は数少ない。この取り組みは1校対1校の点と点の交流ではなく、海外大学、高校、国内大学、高校と連動したネットワークによる試みである。文部科学省ならびに、アジア太平洋国際会議（APEC）の後援を受け、高大連携の先進的な企画でもある。インターネットの教育利用は世界同時進行であり、APEC などでは各国の担当者がデジタルデバインド、コミュニケーションデバインドの克服に連携をとりながら進めている。このような状況を鑑み、日本において、各国の情報教育担当者と連携し、インターネット活用を中心とした国際交流イベントを開催する。』
(WYM 趣意書より抜粋)

ワールドユースミーティングの取り組みは、以下のような流れで進行する。

- 4月 担当教員スタッフ打ち合わせ
- 6月 代表生徒によるプレミーティング
- 8月 ワールドユースミーティング本番
国際プレゼンテーション大会
および、国内外生徒の各種交流



ただし、これらは、あくまでも何らかのフェイストゥフェイスの取り組みが行われるスケジュールである。ワールドユースミーティングの

実践において、最も重要なポイントは、継続的にネットワークによる交流が頻繁に行われている点である。

いくつかのWEB ページと掲示板システム、そしてメーリングリストやテレビ会議システムで、さまざまな交流が展開されている。また、近年では SNS の活用も盛んになってきた。事務的な連絡や打ち合わせにはじまり、教員間・生徒間の意見交換や日程などの調整、各種調査やデータのやりとりまで事前事後に活発にやりとりがある。

この種の交流活動は一過性のイベントだけに重点が置かれたモノになりがちである。しかし、このワールドユースミーティングの取り組みにおいては、本番はあくまで通過点であると参加者が一様に認識できている。したがって、事前・事後の交流も継続的に実施できているのである。



2) アジア学生交流プログラム

(ASEP; Asian Student Exchange Program)

ASEPは、2000年より毎年12月に台湾で開催されている国際交流活動イベントで、高雄市教育省の全面協力のもとで開催されている。台湾側ホスト校と海外からの参加校とで英語によるプレゼンテーション大会を実施することをスケジュールの中心にしている。また、約一週間の会期中は、海外から参加の学生・生徒をホスト校の手配によるホームステイで受け入れ、学校訪問も実施するなど、生活・文化の体験もできる。WYM との姉妹企画で、日本では夏休み、

台湾では冬休みの期間に毎年開催されている。ICT活用、英語によるプレゼンテーションを通して、アジアの英語教育活動と、インターネット時代の国際交流のあり方を追求している。



この活動に、2004年から参加し、近年は日本サイドの事務局的な役割を担当してきた。スケジュールは、例年概ね以下の通りである。

9 月末ごろ～ 大会と渡航日程の調整確認

Ex.) ASEP は冬季休業期間の開催となる
終業式や補講など各校の事情がある
台湾側に対応可能な日程を伝える

10 月 大会日程の決定・日本からの参加調査

Ex.) ネットで参加見込みを確認
相手校がある学校は個別に連絡調整

11 月 旅行手配・プロジェクトチームの決定

Ex.) ホストの組み合わせを決定する
各校で旅行手配を行う
参加者リストを各校から集める
現地日程など全体の確認事項もある
日本の参加者リストを取りまとめる
学校名・航空便のデータなども収集
取りまとめた情報は、日台で共有

12 月中旬まで 手配と運営日程の最終確認

Ex.) 出迎えの手配等を確認
現地での移動手段について確認
大会当日以外の動きは各校確認
参加者の増減や別日程参加者の確認
現地での連絡手段の情報共有
ASEP 大会当日の食事など詳細確認

12 月下旬～ 事後処理と継続的な交流推進



ASEPに参加する日本チームの特徴は、日本各地からのさまざまな参加者で構成されているという点である。通常の国際交流活動では多くの場合、日本チーム全体が1つの団体として行動し、たとえ複数の地域からの参加者が現地で集う場合でも、事前研修等で交流の趣旨や約束事や現地での制約など、かなり事細かな共通理解を求められる。また国際会議、国際学会など基本的に個人や少人数のグループでの参加となる場合でも、費用や日程などをはじめとして、かなり厳密な決まりごとが存在しているのが一般的である。

対して、ASEP では参加者の行動については、プレゼンテーション大会の日程など基本的なイベントを除いては、各自の責任でもって決定し遂行する。換言すれば、参加者が必ずしなければならない事として規定されているイベントの数が圧倒的に少ないといえる。この点から鑑みて、コーディネータの必要性が高いといえる。



この台湾高雄における ASEP にかかわった多くの方は、さまざまな国際交流活動の中でも最

も有意義な活動の1つであると感じられるようである。参加する教員にとっても学生・生徒たちにとっても、学びや気付きの多いこのASEPという取り組み特徴は、柔軟性と継続性にあるのではないかと推察される。この二点は、単に大会当日の、あるいは、台湾高雄での滞在期間だけの種々のイベントや活動だけでなく、事前・事後の取り組みや手配・事務処理といった部分をとおしてより強く実感できる。



3 国際連携アクティブラーニングの考察

このような継続的な実践を通して、ICTを活用した国際連携アクティブラーニングの確かな学びを提供できていることが実感されている。以下の二つの観点において考察する。

(1) 「違う」を埋める ICT 活用の観点

話し合いだけでは進めない高校生の国際協働のサポートを ICT 活用に求める。国際協働研究のための ICT 活用の知見を蓄積する。video conference の活用、協議のための手順、論議をサポートするための図やチャートの活用などが想定される。本実践は教室内でシミュレーション的に行う実習ではなく、情報ネットワークと ICT 機器を活用した国際的な協働作業という現実的な活動をともなう。これは、主体的な情報活用能力育成のための効果的な授業コンテンツとなると考えられる。その評価は、対象生徒や教員への事前・事後のアンケート調査やインタビュー調査のほか、かかわった生徒の卒業後の

進路を追跡調査することでも確認できると想定している。国際的な実証を受けている「探求学習」の授業モデルのサンプルプランとなることを目指して本研究を深めたい。

(2) 高校でのグローバル人材育成の観点

継続的な学校間国際交流活動が取り組みの中心となる本実践の記録が、「距離」「意識」の隔たりを克服する教育効果の高い実践プランのモデルとして活用されると見込まれる。近年、学校における国際交流活動の大きな課題として、単に思い出づくりの道具として交流活動が行われているという、いわゆる交流搾取問題があげられる。参加者相互の将来的なキャリアにこの学びが生きる (Internalize) という本研究の成果が、国際交流活動をともなうさまざまな実践においてモデルとなり、交流校相互の教育方法の改善と教師のファシリテーション能力の向上にも資することが期待できる。

参考

World Youth Meeting 2016

<http://www.japanet.gr.jp/w2016/>

ASEP2015

<http://www.kageto.jp/asep/2015/>

「教育の情報化で生まれる“魅せる先生”」

影戸誠著 インプレスコミュニケーションズ

「これからの情報とメディアの教育」

水越敏行・生田孝至著 図書文化

「コンピュータ教育のバグ」

池田明著 日本文教出版

この研究は、平成 28 年度大阪市教育委員会学校活性化事業「がんばる先生支援」個人・グループ研究の選定を受けています。